

6.5 戦国の遺産・佐々堤 さつ さ てい

6.5 Historical Legacy of Sengoku Age, “Sassa River Levee”

遠藤 和子 (えんどう かずこ)

作家 (「物語 佐々成政」「佐々成政—悲運の知将の実像—」などの著者)

1. 佐々堤

富山県のほぼ中央を北流しながら富山湾に入る常願寺川は、我が国屈指の急流荒廃河川として知られている。

明治初期、政府の招きで来日した治水、砂防の権威者ヨハネス・デ・レーケ（オランダ人）が、治水工事指導のために来県した折り、この川を見て「これは川ではない。滝だ」と評したという。

この常願寺川の中流左岸、地鉄上滝駅から東に向

かってまっすぐ延びている道を7、8分歩くと、常願寺川の土手手前にある常西合口用水^{じょうさい}に突き当たる。この用水の前に立って川下を見下ろす。すると、川床を斜めに横切っている巨石の群れが目に入る。土中深くめり込んでいるが、現れている部分を見ただけで、8人力は要すると思われる巨石ばかりだ。群れの縁の方には、玉石（径18cm程度の自然石）がぎっしりと敷き詰められている。

どの石も水に洗われ、滑らかな肌を見せている。緩やかにうねってきた流れが、この場所にくると、躍り上がるように盛り上がってはすべるように流れていく（口絵写真—12）。

これが410年前、越中に入国したばかりの佐々成政が築いた大石堤、佐々堤の馬踏（天端）の一部に当たる。

常願寺川沿革誌や日本土木史には、つぎのように記してある。

“天正8年（1580）秋、神通、常願寺川出水。富山方面被害あり。霖雨連日止まず。大いに出水す。神通、常願寺川氾濫して富山城を浸し、家屋漂流し、人馬の溺死、算をなす。

佐々成政、大いに之を愁ひ、其の後水患を除かんと欲し、被害地を巡見して、大いに治水に力をいたし、馬を馬瀬口に進めて自ら人夫を指揮し、土石を運搬せしめ、巨岩に己が氏名を刻し、之を河底に埋め、其の上に堅固なる石堤（敷石25間）を築く。”（常願寺川沿革誌）

“馬瀬口前堤防は、左岸大庄村地先の堤防にして、天正8年の洪水後、佐々成政の築造に係る（中略）常願寺川筋堤防の起源なるが如し。”（明治以前日本土木史）

このほか、水防関係の書物などにも、佐々成政が



写真—1 佐々成政像（富山市郷土博物館蔵）

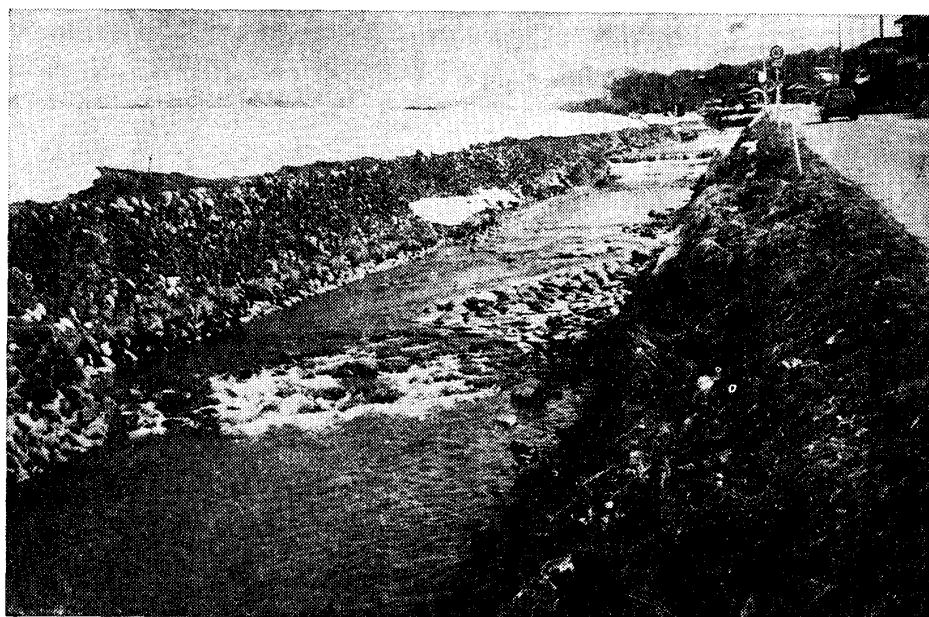


写真-2 佐々堤

馬瀬口の地に馬を進めて陣頭指揮をし、三面玉石張り、敷幅25間（約45m）、長さ80間（約150m）に及ぶ堅固な大石堤を築いたことが記されている。

2. 佐々成政の越中入国

応仁の乱をきっかけにして、世の中の秩序がくずれ、日本各地は戦いの渦の中に巻き込まれた。世にいう戦国時代である。

越中の国でも、豪族や一向宗徒たちが、越後の上杉謙信や甲斐の武田信玄と組んだり離れたりしながら、戦いを繰り返していた。そのうちに信玄が病没し、謙信も天正6年（1578）3月、この世を去った。

かねてから天下統一をもくろみ、加賀の国まで勢力を伸ばしてきた織田信長は、この機会を逃がさなかった。その上、上杉家では、養子の景虎と景勝が跡目争いの戦いを始めた。これを知った信長は、

「越中の国に織田方のくさびを打ち込む好機」として、義弟、神保長住を越中にさし向けた。

長住は、越中で勢力を張っていた守護代、神保長職の嫡男であったが、両親が謙信に攻められて討死し、彼は信長の許に亡命した。信長は彼に妹をめあわせ、越中に戻す機会をねらっていたのである。

こうして2年の月日が流れ、天正8年の夏、上杉家の跡目を継いだ景勝は、諸将に越中出陣の触れを出した。

これを知った信長は、越前府中（福井県今立郡）小丸城主佐々成政に、神保勢の戦いの指揮者となっ

て助勢することを命じた。9月末（現11月初旬）成政はあわただしく府中を發った。

成政は、尾張比良城主、佐々成宗の第5子といわれ、信長の小姓として仕えていたが、2人の兄（孫助、隼人正）がそれぞれ信長の初期に訪れた二つの危機（稲生の戦い、桶狭間の戦い）に際して、壮烈な討ち死をしたことから比良城主となった。そして馬廻衆を経て黒母衣組（信長直属下の親衛隊）の筆頭として活躍した。

この時期の成政の仕事として後世に残るのは、信長が長篠の戦いで、戦国期最強の騎馬軍団、武田勢を打ち破ることができた「鉄砲の三段撃ち戦法」を考案したことである。

また、築城術に長けていたことが「信長公記」に記されている。越前小丸城は、築城途中で越中へ助勢に出かけ、その後越中国主となったため、廃城となったが、いまでも近世初頭の模範構営として保存されている。国主となって住んだ富山城も、自ら縄張りをして浮き城に仕立てている。つまり、優れた土木技術者だったのである。

全国制覇目前の信長が、多くの武将の中から特に選んで北国の最前線、越中に配備したことからみても、成政が優れた資質と手腕を持った信頼するに足る武将として、評価されていたことがわかる。

3. 佐々堤築造の動機

成政が越中に入国したとき、折りしも長雨続きで、神通川、常願寺川が氾濫。富山城下町一帯は濁流が渦まき、家屋が流され、人馬の死傷が多かった。

この状況を目の当たりにした成政が長住と共に、被害地を巡見したことが「肯構泉達録」に記されている。

このとき、荒れ狂う常願寺川の土石流に対抗できる石堤築造を思い立ったのであろう。

それまで常願寺川流域一帯には、畑囲い堤とか人家堤などと呼ばれる馬蹄形の堤防が、村落ごとに形成されていた。すなわち、土地は貴族や神社仏閣の

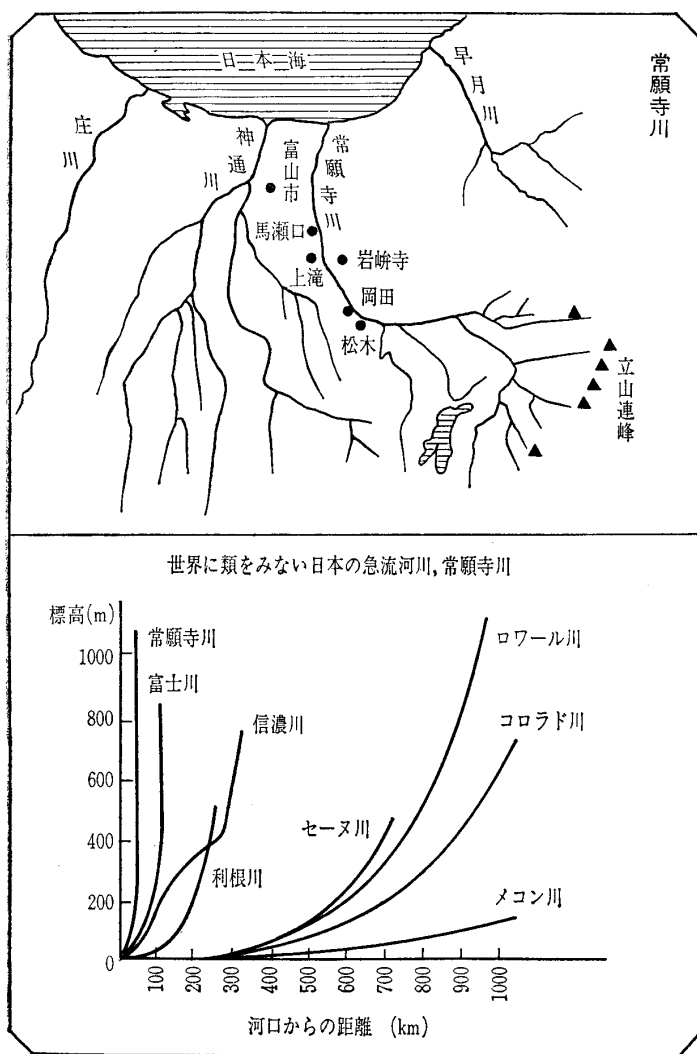


図-1 常願寺川

莊園に皇室の公領もあって、一国の中に、いくつもの異なる支配者が領していた。このため、氾濫に対する統一的な対応策ができず、支配者から管理を任されていた名主や土豪、農民たちの手で、それぞれ村落の周りに高さ2mほどの土手が築かれていた。

ところが、常願寺川は名だたる急流河川。立山連峰に源を発する真川や湯川、和田川、称名川など、それぞれ3000m級の山々から流れ落ちてくる川水を集め、流路は56kmと短い。したがって、河床平均勾配は30分の1。しかも、立山連峰は火山帯なので、地質がもろい。

急峻な高山に降った雨は表土をすべり落ち、山肌をえぐり、雪崩のように加速度をつけながら落下し、莫大な流水エネルギーとなって、巨岩や土砂を木の葉のように押し流しながら、怒とうの勢いで下流へ押し寄せる。平素、6ton余りの水量が4500tonにふくれ上がる。750倍もの大量の水を流すのである。

これが融雪どきや梅雨、台風による集中豪雨、秋の長雨があると繰り返される。中流や下流の被害は惨憺たるものであった。

このため、村々では自領を死守するあまりに、他領の被害や困却をかえりみなかった。むしろ、絶えず反目しあい、対岸の決壊を望んだ。ときには、自領の被害を少なくするために、他領の堤防を破壊し、血で血を洗うような乱闘が起こることも珍しくなかった。

このように、自領を守ることだけに必死で、局部的工事がなされていた時代に、成政が河川に着目し、洪水を防ぐための抜本的な治水事業計画を立てて、川筋堤防を築いたのである。よほど、強力なリーダーシップと大局的な治水方針、土木事業に対しての高い見識と技術を持ち合わせていなければできないことではない。

4. 石堤の築造

石堤築造には、おびたしい石を必要とする。流れてきた転石の中から選んだほかは、山から石舟で運ぶ。護岸工、水制工に使う杉や竹は奥山から切り出し、いかだに組んで流す。その竹で蛇かご(丸い筒に編んだかごに石を詰めたもの)をつくり、わらで縄や俵を編む。なたを振り上げて杭や木杵をつくり、^{げんのう}玄能やのみを使って石を割る。資材づくりだけでなく、堤防と川との間に仮締切り用の土手を築いて、川水を遮断する。そのうえで石積作業を進めていく。

膨大な資材と人力のいる川除け普請。当時としては画期的な大事業であった。本陣、正源寺(富山市)で指揮をとり、人海戦術で進めたと思うが、雪の降りしきり中の作業は難儀を重ねたに違いない。

成政にとって好都合であったのは、上杉勢が越中出陣のために春日山城を出発して、越中との国境近く、能庄までやってきたのに、引き返したことである。上杉景勝は、越中の河川が方々で氾濫している上に、織田家中きっての豪将、戦略上手の佐々成政が神保勢の指揮者となったところから、戦いは長引くと考えた。北陸の冬が目前に迫っていることもあって、雪融けを待って出直すことにした。

こうして、成政は後顧の憂いなく、川除け作業に専念することができた。そして築かれた堤防は、佐

佐々埴・いたち川

神通川
現富山城
旧神通川
(松川)
佐々富山城
土川
太田川
向川原町
泉町
山室
石屋
太田
筏川
八川
清水
又用水
西ノ番
正源寺
馬瀬口
太田用水
佐々埴(一部現存)
佐々埴(一部現存)
上滝

常願寺川
常願寺
利田堤(想定)
利田
日置
西大森
済民堤(現存)
一夜泊稲荷神社
成正靈王
岩崎寺

川をコントロールするための大石堤を築造した。

「常願寺川沿革誌」や古老たちの話によれば、石堤前面の川底には、堤防を守り、水流を調節するための蛇かごや、犬の子、鉄で連結した連石床が置かれていたという。

6. 時代を越えた民政家

成政は、佐々堤築造に並行して、富山城下町を流れているいたち川を大改修した。「肯構泉達録」には、成政が川の氾濫の惨状に、河道を安定させることを考え、それとともに

「稲をこの水で養わば、民の余潤（生活がうるおうこと）とならん」

といって、流域原野の開拓を図ったことが記されている。そして、川幅を深く掘り下げ、兩岸に高い堤防を築いた。

このとき、いくらか川筋を変更したらしい。川筋が立山七社の一つ、刀尾神社の境内を通るところから、神霊を鎮めるために、菩提樹を手植えたという。このいわれを記した石碑が、土地の人たちの手で建立されている。

大々的に改修され、一変した川の姿に、庶民たちが、

「いたち川は、佐々成政がつくったもの」

「いたち川土手は、佐々成政のときにつくられたもの」

と語り伝えられてきたのも、うなずける。

このいたち川は、いまでも富山市街地を流れ、市民に親しまれている。

また、成政は、神通川といたち川との河道変更を利用して、富山城の守りを固めることを思いついた。

一朝事あるときは、2川の合流点の下流、八田ノ瀬（富山市）で水を堰止め、浮き城となるようにした。明治中ごろ、神通川改修の折り、この八田ノ瀬の川底から大樫の埋め木を数多く掘り上げたというから、相当大がかりな堰をつくったのであろう。

このほかにも、佐々堤築造の3年後（天正11年）

やはり秋の長雨で常願寺川が氾濫し、濁流が下流右岸、利田、日置（共に中新川郡）の村々を襲った。

このときも、常願寺を本陣として陣頭指揮に当たり、〈利田堤〉を築いているが、作業途中に過労のために倒れたことが、成政から前田利長に宛てた書状によって知ることができる。このとき家臣たちが、近くにある薬草神・少彦命を祀った社に祈願して病いが癒えたことから、感謝した成政が立派な社殿を建立したという。

江戸時代、この社跡に建立されたのが「浄正社」、それが今日も「一夜泊稻荷神社」「成正霊王」（共に立山町）として引き継がれているが、祭神は成正大明神（成政の転化したもの）、浄正社は「成正さま」を詣でる人々で賑わい、常願寺川流域の村々では、近年まで、祭りの際には「成正大明神」の旗をかかげ、盆踊りの時期がくると、「さっさ踊り」を踊った。

また、利田堤近くの日置神社境内に、足型のような模様の巨石がある。土地の人々は、この模様について、

「成政さんが堤防づくりに出かけるとき、足をかけてわらじの紐を結ばれた足跡だ」と語り伝えている。

これらは、庶民の幸せのために心をくだき、体を張って尽くした佐々成政に対して、民衆が感謝と敬愛の念を示す現れといえよう。

成政は、時代を超えた民政国主として、いまなお、富山の人たちの心の中に生きている。

参 考 文 献

- 1) 物語佐々成政，北日本新聞社，1982。
- 2) 佐々成政，悲運の知将の実像，サイマル出版会，1986。
- 3) 建設省北陸地方建設局編：常願寺川沿革誌，建設省北陸地方建設局。
- 4) 土木学会編：明治以前日本土木史，土木学会。
- 5) 野崎雅明・富山県郷土史会校注：肯構泉達録，KNB興産。
- 6) 太田中一・桑田忠親校注：信長公記，新人物往来社。
- 7) 吉田蒼生雄訳：武功夜話，前野家文書，新人物往来社。